

江戸時代浪花狛犬の一つのグループ—曲玉

磯 辺 ゆ う

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

A Group of Naniwa Stone *Komainu* from the Edo Period—*Magatama*

Yu Isobe

Naragakuen University Narabunka Women's College

江戸時代中期以降、大坂で奉納された石造狛犬の中に様々な型が認められている。文化期を中心とする曲玉グループについて大阪府内の狛犬を整理し直し24件を認め、その特徴の変遷を北・中・南の3地域で調べた。本群は寛政期に頂点を持つ多筋扇尾グループ（8対）に強い影響を受けつつ、比較的作りやすい型として完成されたもので、大阪府の北部、中部、南部において若干の地域的特徴がみられる。

キーワード：曲玉型狛犬、江戸時代、浪花狛犬

1. はじめに

江戸時代中期以降、現在の大阪府下の石工により作られた狛犬を総称して浪花狛犬という¹⁾。浪花狛犬は幕末に向かって大ブームとなり²⁾、周辺に波及して行った。浪花狛犬の揺籃期には、独創的な狛犬が多く、特に腕のある石工が技術をこらして作ったようである。当時大坂や堺には石工の集住区が形成されており³⁾、そのような中から倣う形で多くの似た様式のものが生み出され、さらにブームの到来による制作の簡略化と購入者側の好みの問題を合わせて、流行の型が生まれ、同時に地域性も生じたのではないだろうか。

浪花狛犬の分類はまだ充分体系化されていない状況にある。大阪府の狛犬分類については、主な狛犬について最初に調査分類を行った木村茂氏^{3)~7)}が先鞭をつけ、かなり網羅的に調査分類を行った奈良文化財同好会¹⁾がそれを発展させた。共通するのは、石工集団による特徴をとらえ、西横堀系、東横堀系、堺系等と大きく分類し、その中で下部分類として型を細かく設定していることである。それに対して、参道に出ている大阪府の狛犬の悉皆調査を完成させた小寺氏は、石工集団を離れた形態による大枠での捉え方を行い、浪花狛犬全体に対して住吉型、杭全型、上宮型、三輪型、浪花型、八重垣型、蝦蟇型の7型を提唱した^{2), 8)}。この中で住吉型、上宮型が前2研究と共通する型名称で、その他は新型である。

両分類方式には、それぞれに長短がある。前2研究による分類は石工集団の系統性を意識する一方、分類が細かくなりすぎるときらいがあり、一方小寺氏による分類では全体を大きく捉えることができるが、

どの型にも分類されていない狛犬が相当数ある。筆者は、とりあえず小寺氏の分類に従い、木村氏、奈良文化財同好会による分類を参考に、整理を進めたいと考えている。

筆者は先行研究⁹⁾において、特異な特徴をもちつつも木村氏、奈良文化財同好会で分類がやや混乱している狛犬を、寛政期に頂点をもつ多筋扇尾グループ（8件）としてまとめた。ここに属す狛犬は、小寺氏ではどの型にも分類されていないものであるが、このグループを型と呼べるかどうかは今後の課題として、一旦グループとした。今回は、多筋扇尾グループに強く影響を受けつつ、独自の形態的特徴をもち奈良文化財同好会により曲玉型とされている狛犬群を取り上げる。奉納時期は文化期が中心である。この仲間もやはり一旦グループとしておく。筆者は、文化から天保にかけて名を残す石工泉屋勘兵衛の狛犬（4件）についても先に整理した¹⁰⁾が、これらはいずれも今回の曲玉グループに属している。

2. 方法

曲玉グループの狛犬を整理するにあたって確認した石造狛犬は、小寺氏による大阪府参道狛犬の一覧（文献⁸⁾のp 68～93）の中で推定も含め、最初の元文元年（1736）から文化末年（1818）まで100%（216/216）、文政期63.4%（85/134）、天保期40.9%（67/164）である。ここには既に無いか陣内に置かれているかによって視認できないものも含まれている。なお上記狛犬件数は小寺氏一覧⁸⁾中配列間違いを修正した数字である。また、上記のほか、小寺氏調査当時既に陣内にあった等の理由により一覧からはずれている狛犬も、見られる限り観察した。小寺氏以前の奈良文化財同好会により曲玉型とされた狛犬¹⁾、さらに先行する木村氏があげている関係する狛犬^{3),5)}については、神社不明の1件（楯津神社）以外全て確認しており、視認できないものも含め、上記調査狛犬の中に含まれている。

方法は、狛犬の目視および写真による観察を中心とし、上記文献^{1),3),5)}と比較した。大きさについては小寺氏の調査結果⁸⁾から知ることができるので省いた。特徴の変遷を見るにあたって、大阪府内を3地域に分けた。基本的に小寺氏による分け方⁸⁾と同様に、淀川と大和川に挟まれた東部地域（柏原市含む）と大阪市を合わせて中部とし、それより北を北部、南を南部とした。

なお、部分名称の基本は木村氏³⁾によった。特に首の周りにある毛束について、強く渦状に巻いている毛以外の毛束を波毛と呼ぶ。従来の筆者の論文ではこれを流れ毛と称していたが、捩れているものも含まれるので、木村氏の名称に従い波毛と言うことにする。

3. 曲玉グループに含まれる狛犬

曲玉型という名称は奈良文化財同好会¹⁾による命名である。これに先行する木村氏による分類の中で、曲玉型（奈良文化財）に関係するものは、小山型、長瀬型である^{3),5)}。表1に、木村氏による小山型・長瀬型、次いで奈良文化財同好会による曲玉型¹⁾、磯辺による曲玉グループ、それらに対する小寺氏による型⁸⁾をまとめた。以下、必要に応じ各研究者による型を・・型（木村）、・・型（奈良文化財）、・・

表1 曲玉グループの狛犬、斜体文字（グレー枠）の狛犬は本グループからはすすもの。

神社名	所在地	奉納年月	西暦	木村 ^{3,9)}		奈良文化財 ¹⁾	小寺 ⁹⁾	磯辺	主な特徴				石工	
				型	型				曲玉型○	型	曲玉グループ◎○ 異なる×	胸腹線		目じり
池島神社	東大阪市池島町	享和二年九月	1802	長瀬型	東堀型・文化2年	—	—	—	×	×	丸い	あり	あり	—
天満宮	大阪府西成区岸里東	享和四年二月 ^{1,8)}	1804	小山型	○	—	—	○写真 ^{1,5)} 判定	○	○	丸い	あり	あり	—
神須牟地神社	大阪府住吉区長居西	文化二年六月又は八月	1805	長瀬型	東堀型・文化3年	—	—	×	×	×	丸い	あり	あり	—
川俣神社	東大阪市川俣本町	文化三年九月	1806	長瀬型	東堀型	—	—	×	×	×	丸い	なし	なし	—
二宮神社	柏原市安堂町	文化四年六月	1807	—	◎	—	—	—	—	—	—	—	—	—
矢作神社	八尾市南本町	文化六年正月 ^{1,8)}	1809	小山型	○泉殿宮に似る	—	—	○記述 ^{1,5)} から	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
泉殿宮	吹田市西庄町	文化六年五月	1809	小山型	○	—	—	◎	○	○	丸い	あり	あり	—
泉井上神社	和泉市府中町	文化七年九月吉日	1810	—	—	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
伊射奈岐神社	吹田市佐井寺	文化七年九月十七日	1810	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	吹田 定七
鶴森宮陣内	大阪府中央区森ノ宮	文化七年三月 ¹⁾	1810	長瀬型	—	—	—	—見えなし	—	—	—	—	—	—
片山(秦讃鳴)神社	吹田市出口町	文化八年三月上旬	1811	小山型	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
野々上八幡神社	羽曳野市野々上	文化八年三月吉日	1811	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	東堀 泉屋勘兵衛
長田神社陣内	東大阪市長田町	文化八年正月 ¹⁾	1811	長瀬型?	東堀型	—	—	×違ふ感じ	—	—	—	—	—	—
新屋坐天照御魂神社	茨木市西福井	文化九年二月	1812	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
長瀬神社	東大阪市衣摺	文化九年九月吉日	1812	長瀬型	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	東堀 泉勘
西代神社	河内長野市西代町	文化九年九月吉日	1812	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	さかい 佐兵衛
玉祖神社陣内	八尾市神立	文化九年暮秋吉辰	1812	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
都留美嘉神社陣内	八尾市都塚	文化十年九月	1813	—	—	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
桶津神社	東大阪市桶津	推定文化十年頃 ⁹⁾ 同 [*]	1813頃	長瀬型	—	—	—	○写真 ³⁾ 判定	○	○	—	—	—	—
梶無神社	東大阪市六万寺町	文化十一年三月	1814	長瀬型	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
柴島神社	東淀川区柴島	文化十一年九月	1814	長瀬型	東堀型	—	—	×多筋扇尾グループ	×	×	丸い	あり	あり	—
一回神社	泉南市信達大苗代	文化十四年九月	1817	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
産土神社	東大阪市南鴻池町	推定文化後期 ¹⁾ 同末 [*]	—	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
南宗寺境内社	堺市堺区南旅籠町	推定文化後期 ¹⁾ 同末 [*]	—	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
菅生神社	堺市美原区菅生	文政元年八月吉日	1818	—	○	—	—	◎	×	×	アモド [*]	なし	なし	—
八坂神社	堺市北区南花田町	文政元年八月	1818	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	あり	あり	—
菅生神社	堺市美原区菅生	文政元年十一月	1818	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
新屋坐天照御魂神社	茨木市信久庄	文政二年正月	1819	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
錦織神社	富田林市菅甲田町	文政八年九月	1825	—	○	—	—	×	×	×	アモド [*]	あり	あり	東堀 和泉屋勘兵衛
御願神社	八尾市老原	文政十三年重陽吉■	1830	—	—	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	—
跡部神社陣内	八尾市龜井町	天保三年九月 ¹⁾	1832	—	○	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	東堀 和泉屋勘兵衛
嘉祥神社	田尻町嘉祥寺	天保七年十一月	1836	—	—	—	—	◎	○	○	アモド [*]	なし	なし	大坂松屋町 泉勘
産土神社	藤井寺市小山	推定文化初期 ⁹⁾ 中期 ¹⁾ 弘化頃 ⁹⁾ 文化末以降 [*]	—	小山型	○	—	—	◎	○	○	丸い	阿なし 畔あり	阿なし 畔あり	東堀 六兵衛

—：不明、石工以外の空欄：未調査又はリスト外、奉納年月：日まで記しているのは同年同月の場合のみ、上付き数字：引用文献、*：磯辺推定

グループ（磯辺）、・・・型（小寺）と表記する。

奈良文化財同好会が整理した曲玉型から菅生（文政元年8月）を外すにあたって、曲玉グループ（磯辺）の特徴を規定しなおす必要があった。以下に改めて特徴を記す。

3.1 曲玉グループを定義する特徴

曲玉グループ（磯辺）は、以下の特徴の全てをもっているものとする。表1には2点示した。

(1) 顔の正面、顎下の左右の首波毛がかなり接近し（図1-④⑤）、拝観者側から見た体側の首波毛が前方に向かって屈曲すること（図1-①）。この型の名称となっている特徴である。

体側から前にかけての波毛は狛犬によって長短があるものの全体にかなり短く、顎の真下にある中央の波毛の毛先は、原則左右向かい合い接するか近接する（図1-④）。ただし先端は必ずしも向かい合っていないとしても良く、外に向いているものが文政元年南部に見られる（八坂、菅生11月）（図1-⑤）。

錦織（文政8）（図1-②）は、首波毛の幅は広いが後方に向き、顎下の2本は向かい合うことなく開いていることにより、この条件からはずれる。神須牟地（文化2）（図1-⑥）は顎下の毛がかなり向かい合っているが、体側の毛は強く屈曲しない。菅生（文政元年8月）については後述する。

(2) 特有の顔：この顔の特徴をなす部分は、鼻が平らで幅広く横楕円形に近い点（図1-④⑤⑦⑧）、その小鼻の後方頬部分が膨らみ、耳付近まで鼻の高さと同等の幅の頬がある（図1-①⑨～⑬）点である。頬の上縁ラインは横にほぼまっすぐで、上下に大きく屈曲しない口唇、犬歯の後方比較的長く口が開き、やや口角が上がって笑い顔である。犬歯は1対。鼻は横楕円に近いが初期の頃はやや上に三角の傾向を示している（図1-⑧）。神須牟地（文化2）（図1-⑥）の鼻は明瞭な三角で口唇と頬ラインが屈曲して、曲玉グループとは異なる顔である。錦織（文政8）の鼻も三角である。

(3) 大腿波毛が、尾の付け根に沿って立ち上がる。完全に接している場合（図1-⑭）が多いが、わずかに離れている場合や上方かなりの部分が離れる場合もある（図1-⑮⑯）。

(4) 尾は特徴に幅があるが、全体として多筋扇尾の傾向を見せている（図3-1～7）。ただし文政元年堺市のもの（八坂、菅生11月）には尾の中央に渦がある（図3-6）。

表1の中にある、池島（享和2）、神須牟地（文化2）、川俣（文化3）、柴島（文化10）は上記（1）、（2）、（3）の特徴に一致せず、曲玉グループに入らない。いずれも奈良文化財同好会は東堀型としている。また錦織（文政8）は、奈良文化財同好会では曲玉型とされているが、上述した首波毛の形と顔の点で条件を満たしていない。

菅生（文政元年8月）は（2）と（3）の特徴を備えているが、首波毛は長く、はっきりと屈曲しない（図1-③）ので本グループからはずすことにする。しかしこの狛犬は八坂（文政元年）、菅生（文政元年11月）と良く似た特徴をもっている。後2件も4項で述べるように曲玉グループの典型からかなりはずれており、境界域にあるものとなる。曲玉グループから外した菅生（文政元年8月）とグループ内に入れてある菅生（文政元年11月）は同じ神社にありよく似ていることから、奈良文化財同好会は共に曲玉型としている。以上3件は、首の波毛の状態が、長く屈曲していない菅生（文政元年8月）から八坂（文政元年8月）、菅生（文政元年11月）の順に、短く屈曲し、曲玉型の特徴を備えるようになっていく。こ



①伊射奈岐
文化7年
(1810)



②錦織
文政8年
(1825)



③菅生
文政元年8月
(1818)



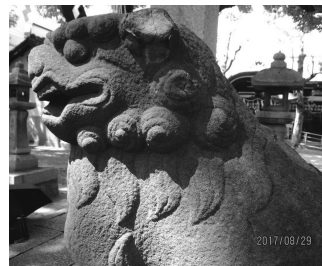
④泉殿宮
文化6
(1809)



⑤八坂
文政元年
(1818)



⑥神須牟地
文化2年
(1805)



⑦片山
文化8年
(1811)



⑧泉殿宮
文化6年
(1809)



⑨二宮
文化4年
(1807)



⑩泉殿宮
文化6年
(1809)



⑪片山
文化8年
(1811)



⑫南宗寺境内社
推定文化末



⑬産土（藤井寺市）
奉納年不明



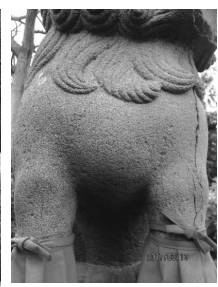
⑭梶無
文化11年
(1814)



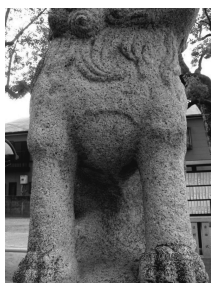
⑮産土
（藤井寺市）
奉納年不明



⑯泉井上
文化7年
(1810)



⑰南宗寺境内社
推定文化末



⑱八坂
文政元年
(1818)

図1 各部分の特徴の例

②③⑥は曲玉グループからはずれるもの、その他はすべてグループ内

の良く似た3件全部を1群として曲玉グループから外す場合、本グループの特徴は、首波毛の中央のものは、“毛先が互いに接近して向かい合う、尾の中央に渦がない”ことになり、特徴がより明瞭になるかもしれない。しかし本稿では、全体として強く曲玉グループを志向していると考え、横から見た波毛が屈曲するという特徴をもって、菅生（文政元年8月）以外の2件を含めることとした。

3.2 その他の特徴と奉納年不明の狛犬の扱い

定義に関わるほどではないが、本グループの中で傾向として見える特徴を表1に2点挙げる。

(1) 目尻の形がアーモンド型を示していることが多い。表1中では、東堀型（奈良文化財）とされている狛犬は目尻が丸い。曲玉グループ（磯辺）の中には、4件だけ目尻が丸い狛犬がある。初期の天満宮（享和4）、二ノ宮（文化4）と南部の泉井上（文化7）、奉納年不明の産土（藤井寺市）（図1-⑬）である。目じりの形は、図1-⑨から⑪のように徐々にシンプルなアーモンド型へと変わっていく傾向にある。南宗寺境内社（奉納年不明 推定文化末）の目（図1-⑫）は本グループの典型となる片山（文化8）（図1-⑩）と同様な形であるが、形式化が見られる。

(2) 胸腹線（図1-⑱）は、無い（図1-⑰）ことが多い。東堀型（奈良文化財）（表1）および曲玉グループ（磯辺）からはずした錦織（文政8）にはいずれもある一方、曲玉グループ（磯辺）内では、天満宮（享和4）、泉井上（文化7）、八坂（文政元年）（図1-⑱）と産土（藤井寺市）（奉納年不明）の呷のみにある。つまり初期と南部にある狛犬である（表2参照）。

奉納年不明の狛犬は、曲玉グループ（磯辺）内に4件存在する。その時期の判断について詳細は4の項で述べるが、結論は次の通りである。盾津（東大阪市）は現物が無いが写真³⁾から木村氏が述べる文化10年頃という判断に同意する。産土（東大阪市）と南宗寺境内社（堺市）は、尾の特徴と全体の様子から文化後期という奈良文化財同好会の判断にやはり同意し、ほとんど末に近い頃ではないかと推測する。産土（藤井寺市）は各先行研究によって判断が異なっている（表1）が、本稿では文化末以降とするにとどめる。

3.3 従来の分類との対応

従来の分類との対応は表1に示すとおりである。

木村氏による分類の中で、小山型（木村）5件はいずれも曲玉型（奈良文化財）となる。ただしこの中で、現在調査可能ではっきりと曲玉グループ（磯辺）と判定できるものは3件（泉殿宮文化6、片山文化8、藤井寺市・産土奉納年不明）で、他2件（天満宮享和4、矢作文化6）は現在境内で見ることができず現存しない可能性がある。その中から奈良文化財同好会により曲玉型最古とされる天満宮（享和4）については文献^{1)、5)}の写真から、矢作（文化6）については泉殿宮と「同年同型」¹⁾「泉殿と瓜二つ」⁵⁾との文献の記述から、筆者は曲玉グループ（磯辺）と判断する。

木村氏^{3)、5)}による長瀬型+長瀬型？（記述があいまい）の中には多様なものが含まれている。つまり奈良文化財同好会の時点で曲玉型1件（長瀬文化9）、東堀型5件、型不明1件（鴉森宮陣内文化7）、情報無し1件（盾津推定文化10頃）である。この中で筆者は長瀬（文化9）を曲玉グループとし、形態情報がない上に陣内にあるために見えない鴉森宮陣内（文化7）を不明とする。盾津（推定文化10頃）

は、記録が木村氏論文³⁾にあるのみで、小寺氏リスト⁸⁾においては神社名もない。地図上でも発見できず、名称から可能性がある盾津御縣神社には新しい狛犬があるだけである。しかし木村氏の写真³⁾によると曲玉グループの典型と見ることができるので、中に含めると同時に、奉納時期を木村氏³⁾の推定のように典型的なものが奉納されている文化10年頃として良いと考える。長瀬型+長瀬型？(木村)→東堀型(奈良文化財)の5件はいずれも曲玉型グループ(磯辺)に含めない。この中で柴島(文化10)は、多筋扇尾グループに入るものである⁹⁾。長瀬型？(木村)の長田陣内(文化8)は、後ろから見るだけで、詳しくわからないが、印象は東堀型(奈良文化財)と同様である。

奈良文化財同好会では、新たに14件を曲玉型に加えている。この中で菅生(文政元年8月)、錦織(文政8)は定義で述べた理由により曲玉グループ(磯辺)から外し、曲玉型(奈良文化財)の最終とされる跡部陣内(天保3)は見えず、文献上の形態情報もないために不明とする。

筆者が新たに曲玉グループとして加えたのは、二宮(文化4)、泉井上(文化7)、津留美郷陣内(文化10)、御劔(文政13)、嘉祥(天保7)である。嘉祥(天保7)が本グループの最終となる。

以上について小寺氏は4件(新屋坐天照御魂文化9、一岡文化14、南宗寺境内社推定文化末、嘉祥天保7)を浪花型とし、その他はいずれも型未指定である⁸⁾。

4. 曲玉グループ内での形態的変遷

狛犬の特徴を、地域、年代に分けて表2に示した。形態的特徴から小グループを認め記号をつけた。表2中で前脚長として表わされている内容は、体形に相当する。前脚長が長いのは長身を、短いのは短軀つまりずんぐりしていることを示している。数的な特徴については $Ax - Bx$ を短縮して $x - x$ と表記する。各狛犬については文末に全身と尾の写真を示す(図3-1~7)。写真は、狛犬が今後失われた時参考になるのでできるだけ示しておきたい。

4.1 初期

曲玉グループ(磯辺)の初期的なものは享和4(1804)から文化7(1810)年にある(表2)。尾の毛束先の突起は Ax とも基本的に9(9-9と表記)で、全てかなり大きく巻き、毛筋が中央に向かうという多筋扇尾の特徴を強く備えている(図3-1)。

このグループの最初と思われるA天満宮(享和4)(大阪市西成区)は写真^{1),5)}からでしかわからないが、首波毛がやや長めである。また写真からも尾の巻き毛が大きく、より強く多筋扇尾の特徴を受け継いでいることがわかる。次いで中・北部に現れたB群中現存2件(二宮文化4、泉殿宮文化6)は顎横の巻き毛が横に突出し顔に比べて首が細く、尾先の巻き毛がやや小さいという特徴もっている。矢作(文化6)は現物を見ることができないが、文献によれば、首巻き毛が突出するという特徴も備えており、泉殿宮と「同型」¹⁾、「泉殿と瓜二つ」⁵⁾とのことである。ただ現存2件は曲玉グループでは他にない Ax の耳が立ち耳という特徴を持っているが、矢作(文化6)は垂れ耳である¹⁾。首波毛の中の捩れ毛については、奈良文化財同好会¹⁾は「文化後半になると捩れ毛が入るものが多い」と述べているが、泉殿宮(文化6)

表2 曲玉グループ狛犬の特徴と変遷

共通点 時期区分	初期：尾は古典的、体型その他の特徴多様				盛期：典型的				終期：特徴に開れがみえる、又は模倣的。		
	享和4 (1804)	文化4 (1807) ～文化6 (1809)	文化7 (1810)	文化7 (1810)	文化8 (1811) ～文化10 (1813)	文化9 (1812) ・文化11 (1814)	文化14 (1817) ・推定文化末	文政元年 (1818)	文政2 (1819) ～天保7 (1836)	時期不明	
耳	阿吽とも垂れ耳	咄立ち耳					阿吽とも垂れ耳				
前脚長	中脚	長脚					短脚			短脚	
首波毛	長め	短	長め		短		長め～短 中央1対の先端が向かい合わない。	短	短	短	
尾の毛束	阿9-吽9、9-8?			7-7	9-9	7-7、9-8	7-9、8-9、9-9	7-7、7-8	7-7、9-9	9-10	
尾の毛束	直毛突起無く、全部巻き										
	先の巻き強い	先の巻きやや弱い	先の巻き強い	直毛突起少	直毛突起3 (片方0もある)	直毛突起少～多	直毛突起少。 毛筋が斜めになる束がある	直毛突起3 (片方2もある) 中央に巻き毛1	尾の特徴は様々		
北部	A ・天満宮 (大阪市西成区) 9?-?.直0?-?.?-? ?-?	B ・泉殿宮 (吹田) 9-9、直0-0、1-0	D-1-1 ・伊射奈岐 (吹田) 7-7、直0-1、1-1	D-2-1 ・片山 (吹田) 9-9、直3-3、1-2	D-1-2 ・新屋坐天照御魂 (茨木) 7-7、直1-2、3-2	D-2-2 ・梶無 (東大阪) 9-8、直5-2、3?-2	D-3 ・産土 (東大阪) 7-9、直0-1?、0-1	D-5 ・御輿 (御殿尾) 9-9、直1-0、0-1	F ・新屋坐天照御魂 (茨木) 7-7、直3-?.、0-0 D-1-2の模倣・形式化。尾の下部巻き毛部分と上部直毛部分が明瞭に分離		
南部	C ・泉井上 (和泉) 9-8?、直0-0?、0-1 尾の巻き強い。尾は1を受け継ぐ。	D-2-3 ・西代 (河内長野) 9-8、直3-2、0-0	D-4 ・一岡 (泉南) 8-9、直2-0、2-5 ・南宗寺境内社 (堺市堺区) 9-9、直2-1、6-7	E ・八坂 (堺市北区) 7-8、直3-3、0-1 ・菅生 (堺市美原区) 7-7、直3-2、2-0	D-6 ・嘉祥 (田尻) 7-7、直0-0、1-1 D-3との関連性が伺える。	D-7 ・産土 (藤井寺) 9-10、直0-0、0-1 B又はD5との関連性が伺える。					

注1) 斜体文字で表したものは天満宮 (大阪西成 享和4)、矢作 (八尾 文化6)、唐津 (東大阪) は視認できないが、文獻上から判断したもの。

唐津 (東大阪)、産土 (東大阪)、南宗寺境内社 (堺)、産土 (藤井寺) は奉納年不明のもの。

注2) 数字表記「x-y-z、直x-y-z、x-y-z」は、前から順に「尾の突起数、首波毛の突起数、首波毛の中の振れ毛数」を阿一吽の形で示している。「?」は破損、視認できない等により推定又は不明。

の阿に既に1束見られる。

翌年南部に奉納されたC泉井上（文化7）は、大腿波毛もやや尾から離れており（特に阿）、尾の突起も呷で8かもしれない（先が破損しているためにはっきりとはわからない）等、やや異なる雰囲気を示しているが、尾の巻き毛が大きく、最初の天満宮（享和4）を受け継いでいるとも言える。一方、北部では同時期に既に次の盛期が始まっている。

4.2 盛期

北部の伊射奈岐（文化7）から中・南部の文化末頃までが、典型的なスタイルが確立され最も盛んに本グループの狛犬が奉納された時である（表2）。この時期のものを典型的なDという群にまとめる。全体に脚の短いずんぐりとした体形、短くかっきりと曲がった首波毛、尾の上部に直毛突起があり中央がふっくらと膨らんだ尾、独特の顔がその特徴をなしている（図3-2～5）。全体に初期の多筋扇尾をかなり受け継いでいる形態から簡略化と様式化が進んでいる。しかし多くの場合、丁寧な仕上げが行われ、狛犬の表情も豊かである。

最初は北部のD-1-1伊射奈岐（文化7）（図3-2）である。尾の突起は7-7と少なくなっていることがこの狛犬の大きな特徴で、その先はほとんどが巻いており呷の先1つだけが直毛となっている。首波毛の捩れ毛は1-1と初期に比べやや増加傾向である。次いで登場する文化8年（1811）～文化10年（1813）のD-2-1が本グループの代表となるもので、中でも吹田市片山（文化8）と羽曳野市野々上（文化8）が典型となる（図3-2）。尾の突起は9-9で、直毛突起は基本的に3-3、ただし野々上は3-0である。首の捩れ毛は片山1-2、野々上1-1である。その他の、長瀬（文化9）（図3-3）は破損、玉祖（文化9）と津留美寫（文化10）（図3-4）は陣内でよく見えない、盾津（推定文化10頃）は写真でしか確認できないという状況で不明部分が多いが、恐らくこの群に入るものと考えられる。

典型的なものが作られている時期に重なる文化9年（1812）に、上記典型とはやや異なる狛犬も作られている。北部ではD-1-1伊射奈岐（文化7）を引き継いでいると思われる、尾の突起7-7、直毛突起1-2で少ない一方、首の捩れ毛は3-2と多くなっているD-1-2新屋坐天照御魂（文化9）（図3-3）が奉納され、南部では尾の突起が9-8、直毛突起も3-2でともに多く、首の捩れ毛が無いという、D-2-1を引き継ぐあるいはさらにさかのぼる特徴を備えたD-2-3西代（文化9）（図3-3）が現れた。その後、中部では典型D-2-1の直系の子孫のような、しかし首の捩れ毛が多くなったD-2-2梶無（文化11）（図3-4）が登場する。中・北部では首の捩れ毛が多くなる傾向を示している。

文化期末は曲玉グループ盛期の終わり頃になる。ここには奉納年不明のものも2件（産土・東大阪市、南宗寺境内社・堺市）（図3-5）入れてある。それは文政期以降のような模倣的なものとは異なる典型に近い雰囲気をもっていること、文化14年（1817）の一岡（泉南市）（図3-5）と同様に尾の毛束の一部に毛筋が斜めに入っていることにより、この文化末に位置づけることとした。尾の毛筋が斜めに入るのはこの時期と、最後の嘉祥（天保7）だけである。尾の先の数、直毛の数、首の捩れ毛の数は三者三様である。中部の産土（推定文化末）（東大阪市）は、全体に仕上げが粗く、尾の突起や首の捩れ毛も少なくD-3とした。一方、南部の南宗寺境内社（推定文化末）（堺市）と一岡（文化14）（泉南市）は仕上げが大変美しく丁寧に作られており、尾の特徴や多い捩れ毛等からこの二つをD-4とした。なお一岡

(文化14) は阿の尾の形が特異である (図3-5)。

首の捩れ毛は南宗寺境内社 (推定文化末) を頂点に文政以降減少する。

4.3 終期

文政元年 (1818) から天保7年 (1836) までほぼ20年間に計5件が散発的に奉納されている。典型からずれるものや、模倣的なものとなる。

文政元年 (1818) の南部のE群2件 (八坂、菅生11月) (堺市) (図3-6) は、尾の中央に巻き毛があること、首の波毛が、典型的な曲玉となっていないことにより、本グループの中で特異なものとなっている。ともに首波毛は、拝観者側の体側では曲玉的に幅広く、曲がっているが、反対側の体側ではやや長く、典型的に曲がっていない。また中央顎の下の波毛は、八坂 (文政元年) の場合阿咩とも先が外向きになっており、菅生 (文政元年11月) の場合、阿では典型的な向き合う形、咩では先が外向きになっているという状況である。

翌年北部で奉納されたF新屋坐天照御魂 (文政2) (図3-6) は、いかにも模倣的、形式的な作りである。すぐそばの盛期の新屋坐天照御魂 (文化9) をモデルにしたものであろう。首の捩れ毛が無いのは省略されているものと考えられる。中部D-5御劔 (文政13) はD-2群の模倣、南部D-6嘉祥 (天保7) はD-3との関連性が伺えるがいずれも新屋坐天照御魂 (文政2) (図3-7) とは異なり、力の入ったものである。

藤井寺市の産土は奉納年不明である。木村氏は文化初期⁵⁾、奈良文化財同好会は文化中期¹⁾、小寺氏は弘化⁸⁾と推定している。形態的特徴で見ると、確かに文化中期頃の体に古典的な尾、丸い目尻がついているが、全体に模倣的な感じがある。特に古典的に見える尾は、多筋扇尾を目指しているが、毛流れが不自然である。そのような尾に対し、しっかりと彫りこまれた後ろ足の間 (古い時期に多い特徴、特に意識的に丁寧に作る場合もある) という混乱した状況が見えるので、奉納時期を特定することが困難である。今は文化期末以降というあたりにとどめておきたい。

5. 分布と地域性

5.1 分布

先行する多筋扇尾グループ (磯辺) の分布もあわせて図2に示した。多筋扇尾グループ (奈良県内1件を除く) は大阪市とその近傍特に東部が中心である。曲玉グループはその分布を広げた形であり、東大阪市、八尾市から南部の大和川流域が中心となる。さらに南の地域では点々と散らばっている一方、北部吹田市から茨木市にかけては連なって分布している。

5.2 地域性

表2を見ると、曲玉グループは、最初大阪市内から次いで中・北部にかけてかなり多筋扇尾グループを意識した作りの狛犬から始まっている。

北部は吹田市から始まっているが、その後も吹田市は曲玉グループ内でかなり先進的であり、典型的なD群では形態的工夫が先行している。首の波毛に捩れ毛が混じることは北部で泉殿宮（文化6）から新屋坐天照御魂（文化9）まで徐々に多くなり、その後中部梶無（文化11）、南部南宗寺境内社（推定文化末）で最高になる。また尾の突起数が9-9から7-7に減少するのも北部が先行する。この二つの特徴は、曲玉グループに特有のものではなくこの時期他の狛犬群でもよく見られることである。そのような形を部分的に取り入れるのが早かったということであろう。

中部では北部の吹田市の伊射奈岐（文化7）、片山（文化8）に続いて多くの典型的曲玉グループの狛犬が奉納された。一方、南部では中部の影響下にある狛犬、つまり中部で製作されたと考えても良さそうな狛犬（野々上文化8、南宗寺境内社推定文化末、嘉祥天保7、産土推定文化末）がある傍ら、特異な印象をそれぞれにもつ狛犬が広く散在する。それは泉井上（文化7）、西代（文化9）、一岡（文化14）、八坂（文政元）、菅生（文政元）で、同時期の北・中部に比べるとやや古典的な特徴を一部に残しており、堺あるいは地元石工によるのではないと思われる。

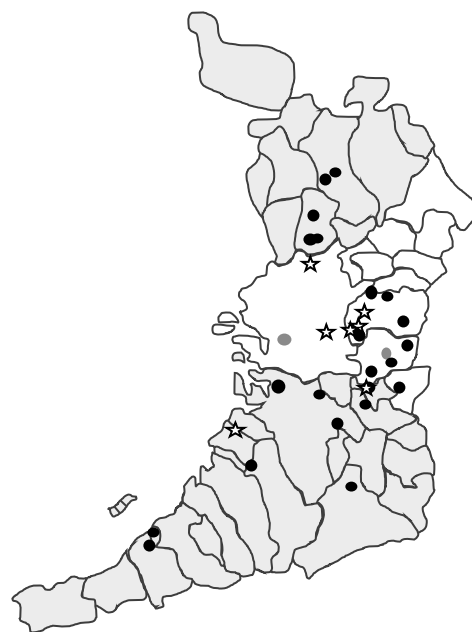


図2 曲玉グループ（●、現物が確認できないものは灰色）と多筋扇尾グループ（☆）の分布（大阪府）。白抜き地域は中部、盾津神社は所在不明により省略

6. 石工

北部で名を残している石工は、吹田の定七である（表1）。この人は寛政期から全く異なるスタイルの3件の狛犬を残すと同時に、曲玉グループでも最初に典型的なものを作ったことになる。定七はその狛犬の特徴から南部からやってきて、吹田で仕事を続けたのではないかと推測されており¹⁾、かなりチャレンジ精神をもった人と考えられる。北部で狛犬の形態が先行的であったことと、この人の存在は関係するだろうと推測される。

もう一人の、曲玉グループを代表する石工は大坂東堀に店をもつ泉屋勘兵衛である。勘兵衛の銘がある狛犬合計4件のどれもがこのグループに入っており、中でも最高のものは最初の野々上（文化8）である。勘兵衛の銘を残した人物は2人いると考えられ、勘兵衛〔文化〕と勘兵衛〔天保〕と表記されている¹⁰⁾が、文化時代の勘兵衛の方が良い腕をもつと思われる。

片山（文化8）の作者を推測することはきわめて難しい。野々上（文化8）と片山（文化8）は大変良く似ており、奈良文化財同好会は片山（文化8）を勘兵衛作と推測している¹⁾。ともに同年同月の奉納である。ただ奈良文化財同好会は伊射奈岐（文化7）の作者が定七であることに気づいておらず、定

七が曲玉スタイルの狛犬を作ったことに気づいていないことにも留意する必要がある。

定七のそれまでの2作を見、さらに伊射奈岐（文化7）を見たとき、定七が片山（文化8）を作れないとはいえない。なお、文字を比べると片山（文化8）の「文化」は特徴ある勘兵衛〔文化〕のものとは異なる。どちらかと言えば定七の「文化」に近いと言えるかもしれない。ただ、狛犬と台座との作者が異なることはよくあることなので、狛犬を勘兵衛、台座を地元の定七と考えることも可能である。その上でよく見ると、狛犬と台座の石質が同じで、微妙な色も合わせて全部が1セットのものと見られ、上下とも1人の手になると考えてよい。断定できないが、どちらかといえば、筆者は片山（文化8）を定七と考えてもよいのではないかという考えにある。もしも、そうだとすると、同年同月に奉納された二つの良く似た狛犬は、互いに無関係に作られたものとは思えないが、二人の石工の関係は不明である。どちらにしても、北部の先進性も合わせて、定七についての研究を深める意義がありそうである。

二人のほかに銘を残しているのは、ともに南部の1件の狛犬に名を記す堺の佐兵衛（西代文化9）と大坂東堀の六兵衛（産土奉納年不明 藤井寺市）である。堺石工は広く活躍しており、石造参道浪花狛犬の最初と言えそうな住吉大社（元文元年1736）を筆頭に、主に南部に多くの狛犬を残している¹⁾。北・中部とはやや傾向を異にしており、木村氏^{3)~7)}、奈良文化財同好会¹⁾は「堺系」を設定している。佐兵衛による西代（文化9）も北・中部とはやや印象の異なる顔つきで、時期的に首波毛の中に捩れ毛が無いのも珍しく、古典的である。一方、六兵衛は、大坂における石屋集住区の一つである東堀の石工であり、中心地にいるといっても良い。この狛犬は多くの点で古典的であり、木村氏も奈良文化財同好会も文化初期あるいは中期と推定している^{1), 5)}が、それは模倣によると考えられ、時期を特定できない。小寺氏はかなり遅い作と判断し、弘化年間と推定している⁸⁾。筆者は文化後期以降というあたりの推定しかできないが、ただこの狛犬から受ける印象からは、六兵衛は立派な狛犬を作ろうという意識の中で、このグループを選び、古典を学んで作ったのだらうと思われる。同神社にある文化15年の狛犬も多筋扇尾を少し意識したように見えるが、六兵衛のほうが細部までていねいに作っている。

銘の無い他の狛犬の作者を推定することは今後の課題としてここでは扱わないこととする。

7. おわりに

文化期に頂点をもつ曲玉グループの狛犬は、寛政期に頂点をもつ多筋扇尾の狛犬を強く意識したつくりであるが、高い技術と手間をかけた多筋扇尾に比べ、簡略化した形をとっており、時代が下るにつれその傾向はよりはっきりとする。文化期以降の狛犬ブームの到来による浪花狛犬全体の傾向が、この曲玉グループにも現れていることになる。しかし、やや笑った平らな鼻の顔とずんぐりした胴体は愛嬌があり、ふっくらとした尾も柔らかさをもっており、一定の人気をもったことが伺える。文化中期の頃、非常によく似たスタイルの狛犬群を形成した。

顔、毛、尾その他各部分の特徴は、まとまりをもった時典型として型あるいはグループを形成する一方、石工により独立に取りあげられることも多い。そのため典型となる狛犬群の周辺に、他の型・グループの特徴と交錯している場合がみられる。また典型の特徴と思われるものが、時代が下るほどに崩れて

くることもよくあることである。中でも多筋扇尾の独特の尾は、筆者の見るところでは、曲玉グループだけではなく多くの型の中に、変形しながら残存、継承されているようである。この多筋扇尾の影響の広がりについては今後の課題となる。

共通する特徴部分は狛犬によって様々で、いろんな狛犬間で関連し合い、全ては連続的とも言える。それでも型を認識することは、時代と地域における狛犬の流れを知る上で有用なことであると考え。今回、従来の研究を検討し、改めて曲玉グループの特徴を明確にして範囲を定めることとした。亜曲玉グループとも言えそうな、曲玉グループからはずれるが良く似た狛犬群は、今後他の型の狛犬が整理されるにつれ、より理解ができるようになるだろう。また、多くの石工が関わっていると考えられる多数の狛犬を理解するには困難があったが、地域と年代を区分し、あわせて考えると見えてくるものがあることがわかった。他の型・グループにも応用ができるのではないかと考えている。

浪花狛犬研究の足がかりを作った先人の研究に学ぶことが多かったことと合わせ、各調査の時期により失われていくものがあり、今後のために写真、データを残していくことが重要であることが実感された。木村茂氏、小寺慶昭氏および奈良文化財同好会の研究は貴重なものであり、その労と功績は大きい。

引用文献

- 1) 奈良文化財同好会 (1999) 狛犬の研究—大阪府の狛犬—。165pp. 奈良文化財同好会。
- 2) 小寺慶昭 (2003) 大阪狛犬の謎。276pp. ナカニシヤ出版。
- 3) 木村茂 (1970) 大阪近郊の石製狛犬の研究 (第1報) —年代不明の狛犬について—。大阪教育大学紀要19: 第I部門 163-180。
- 4) 木村茂 (1971) 大阪近郊の石製狛犬の研究 (第2報) —年代不明の狛犬について (続)—。大阪教育大学紀要20: 第I部門 99-116。
- 5) 木村茂 (1972) 大阪近郊の石製狛犬の研究 (第3報) —元文元年より文化14年まで—。大阪教育大学紀要21: 第I部門 73-93。
- 6) 木村茂 (1975) 大阪近郊の石製狛犬の研究 (第4報) —文政元 (1818) ~天保14 (1843)—。大阪教育大学紀要24: 第I部門 113-132。
- 7) 木村茂 (1977) 大阪近郊の石製狛犬の研究 (第5報) 弘化元年 (1844) —慶応4年 (1867)。大阪教育大学紀要26: 第I部門 25-36。
- 8) 小寺慶昭 (2003) 大阪府の参道狛犬 参道狛犬調査報告書1. 108pp.
- 9) 磯辺ゆう (2014) 斑鳩町龍田神社狛犬と多筋扇尾—江戸時代浪花狛犬の1グループ—。奈良文化女子短期大学紀要 45: 39-62。
- 10) 磯辺ゆう (2015) 多筋扇尾狛犬を受け継ぐ“泉屋勘兵衛”。奈良文化女子短期大学紀要46: 11-25。



二宮神社 文化4年 (1807)



泉殿宮 文化6年 (1809)



泉井上神社 文化7年 (1810)

図3-1 曲玉グループ狛犬 文化4～7年. 尾: 左-阿、右-吽



伊射奈岐神社 文化7年（1810）

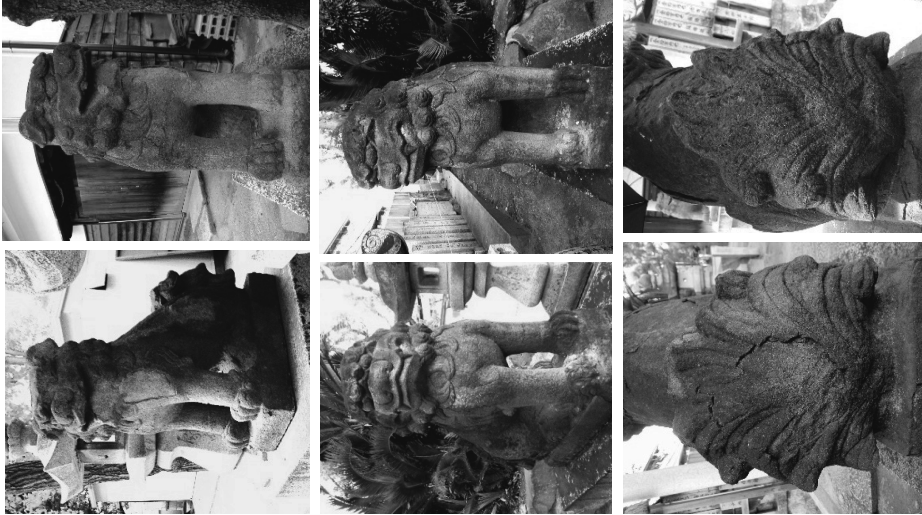
片山神社 文化8年（1811）

野々上八幡社 文化8年（1811）

図3-2 曲玉グループ狛犬 文化7～8年. 尾：左-阿、右-吽



西代神社 文化9年 (1812)



長瀬神社 文化9年 (1812)



新屋坐天照御魂神社 文化9年 (1812)

図3-3 曲玉グループ狛犬 文化9年. 尾：左-阿、右-呷



玉祖神社陣内 文化9年（1812）

都留美鳥神社陣内 文化10年（1813）

梶無神社 文化11年（1814）

図3-4 曲玉グループ狛犬 文化9～11年. 尾：左-阿、右-吽



一岡神社 文化14年（1817）

産土神社（東大阪市） 推定文化末

南宗寺境内社 推定文化末

図3-5 曲玉グループ狛犬 文化14年、推定文化末. 尾：左一阿、右一吽（産土中央・右一吽）



八坂神社 文政元年8月 (1818)

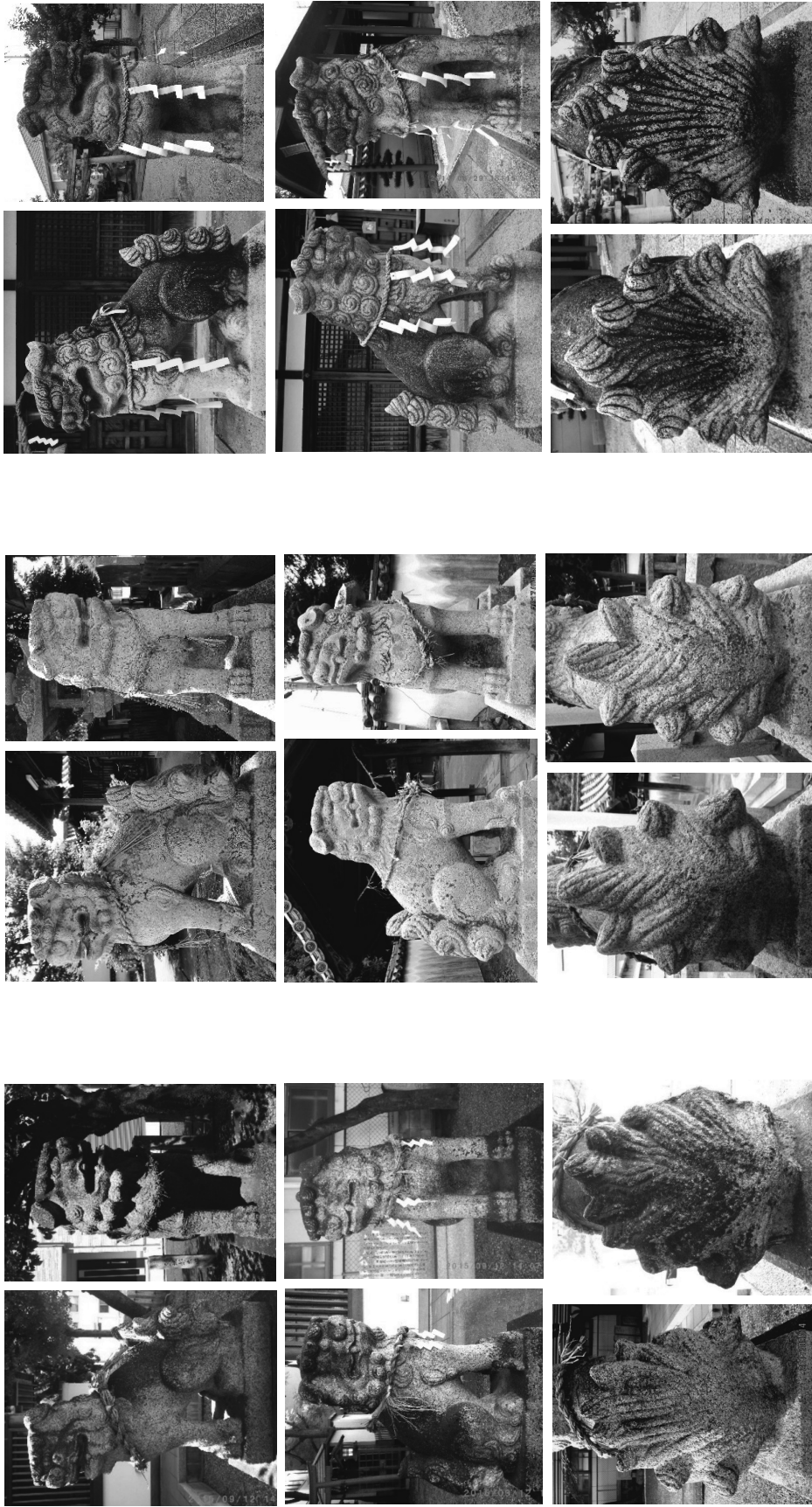


菅生神社 文政元年11月 (1818)



新屋坐天照御魂神社 文政2年 (1819)

図3-6 曲玉グループ狛犬 文政元~2年. 尾: 左-阿、右-吽



産土神社 (藤井寺市) 奉納年不明

嘉祥神社 天保7年 (1836)

御劔神社 文政13年 (1830)

図3-7 曲玉グループ狛犬 文政13~天保7年、奉納年不明. 尾: 左-阿、右-吽